

ASEAN地域で広がる大学の国際化

また、ネットワーク強化の教育研究活動の一環として、年一回、分野ごとに地域会議を開いている。通常はASEAN地域の大学が主催者となるが、今回は京都大学防災研究所の寶馨教授がリーダーを務める「京都大学グローバルCOEプログラム」が協力。分野横断型で「防災工学」をテーマとし、特別に日本での開催となった。

ホストを務めた京都大学防災学研究所の清野純史教授によると、「2010年は阪神・淡路大震災から15年、私たち日本の研

AUN/SEED-Netでは、工学系を9分野に分類。各分野でASEAN地域の一大学をホスト大学とし、日本の大学コンソーシアムが支援する形で教育研究活動が進められる。ASEAN域内や日本への留学を通じて、修士・博士号を取得できる奨学金プログラムも設置した。「ASEAN地域の大学では今明日に必要な実践的な技術を、日本の大学では将来のための先端技術を学ぶ。自分たちの中ですみ分けをして、効果的に研究を進めているようです」。

ASEAN地域で広がる大学の国際化

研究者にとっても意味のある年です。ASEAN側からの要望もあり、彼らに日本の現場を見てもらうことにした」という。最終日には、人と防災未来センター（神戸市）と野島断層記念館（淡路島）を視察。参加者たちは、地域住民を巻き込んだ防災対策について、より実践的なアイデアを得たようだ。

ゲストスピーカーとして招かれたガジャマダ大学大学院地質工学科のドウィコリタ教授は、06年のジャワ島中部地震の経験を生かし、ジョクジャカルタ周辺のハザードマップ作成に取り組む。

「私たち大学の役割は、地域に研究成果を還元すること。住民も活用できるような実用的なハ



京都大学の地域会議でプレゼンテーションをする、ガジャマダ大学のドウィコリタ教授。過去の被災経験を基に、地震、防災分野の研究を進めている

プロジェクトがスタートして7年。フェーズ2が終了する2013年にはAUN/SEED-Netを通じて、修士・博士号を取得する若手教員の数は900人以上に上るとみられる。この数字は、域内のメンバー大学の教員の約2割が、AUN/SEED-Netの卒業生という計算になる。「ASEAN地域の学生たちは、国に貢献したい」という意識が強い。目の輝きが違う」と堤さん。しかし、「現状では研究設備もまだまだ不足してお

ザードマップを目指し、被災地周辺でのヒアリング調査も積極的に進めています。そう話す彼女の研究のパートナーは、九州大学の渡邊公一郎教授。「10年前に初めてガジャマダ大学に行った時は、ほとんど留学生がいなかったのですが、今では現地にいくたびに国際化が進んでいるのを感じます。私の研究室の学生を連れて行くこともあるのですが、ASEAN地域の学生たちの熱意に刺激を受けているようです」と、その変化に喜びを見せる。

プロジェクトがスタートして7年。フェーズ2が終了する2013年にはAUN/SEED-Netを通じて、修士・博士号を取得する若手教員の数は900人以上に上るとみられる。この数字は、域内のメンバー大学の教員の約2割が、AUN/SEED-Netの卒業生という計算になる。「ASEAN地域の学生たちは、国に貢献したい」という意識が強い。目の輝きが違う」と堤さん。しかし、「現状では研究設備もまだまだ不足してお

り、自身の能力を十分発揮できる環境が整っていない。これらには、彼らの経験や技術をさらに向上させ十分に生かすことのできる仕組みづくりが重要と訴える。

「AUN/SEED-Netのメンバーは、私にとって家族のようなものです」と力強く語るドウィコリタ教授。「これからも共に研究成果を高めていきたい。AUN/SEED-Netを通じて、ASEAN地域の成長を支える人材は確実に育っている。



(右)日本人教授から指導を受けるASEANの学生たち。大学間の緊密なコミュニケーションが、プロジェクトの成功につながっている
(左)ジョクジャカルタ近郊、地すべりの現場を調査するガジャマダ大学の学生たち。自らの足を使って、調査研究に励んでいる



淡路島の野島断層記念館を視察するASEAN地域の研究者たち。九州大学の渡邊教授(中央)から15年前に生成された地震断層について説明を受けた

ASEANの成長を支える人づくり

近年、急速に成長を続ける東南アジア諸国連合(ASEAN)地域。JICAが日本の大学とともに築き上げてきた「大学ネットワーク」が核となり、ASEAN地域の未来を担う人材育成が進められている。

ネットワークを活用した大学の能力強化

残暑厳しい8月下旬、京都府宇治市にある京都大学防災研究所。夏休みの真っただ中、人けの少ないキャンパスに、ASEAN地域の工学系大学の研究者たちが集った。会場前の看板には、「JICA『アセアン工学系高等教育ネットワーク(AUN/SEED-Net)プロジェクト』」の文字。3日間にわたって、AUN/SEED-Netの地域会議が行われた。

AUN/SEED-Netは、JICAが2003年から実施している技術協力プロジェクト。1997年のアジア通貨危機を契機に、ASEAN地域の産業界を中長期的に支える産業人材の必要性が問われ、日本政府は「工学系高等教育機関の能力強化」を提唱。これを受けJICAは、域内の工学系トップ大学19校と日本の大学11校でネットワークをつくり、若手教員の学位取得留学、共同研究、分野別の地域会議、メンバー大学間の教員派遣などを通じて、人材育成に取り組んできた。

一つの大学を支援するのではなく、複数の大学のネットワー

クを活用した協力。そのアイデアは、90年〜02年にインドネシアで行われた「高等教育開発支援プロジェクト(HEDS)」にまでさかのぼる。AUN/SEED-Net事務局の堤和男チーフアドバイザーは、「HEDSでは、AUN/SEED-Netのメンバー校でもあるバンドン工科大学とガジャマダ大学がホスト大学となり、スマトラ島とカリマタン島の地方大学教員の能力向上を図りました。大学をネットワーク化することにより相乗効果が生まれ、現地での評価も非常に高かった。そこでAUN/SEED-Netは、この体制を一部踏襲してスタートしたんです」と話す。

AUN/SEED-Net (ASEAN University Network/Southeast Asia Engineering Education Development Network)

